こども文教委員会　行政視察報告書

1　日程

令和６年８月 21 日（水）～23 日（金）

2　視察先及び視察項目

	視察先	視察項目
1	富山県富山市	富山市立図書館本館について
2	大阪府寝屋川市	寝屋川市立望が丘小学校・中学校について
3	大阪府豊中市	子どもの居場所ネットワーク事業について

3　視察委員

○ 委員長	岡　元　由　美	大田区議会公明党
○ 副委員長	押　見　隆　太	自由民主党大田区議団・無所属の会
○ 委　員	松　原　秀　典	自由民主党大田区議団・無所属の会
	北　村　やよい	自由民主党大田区議団・無所属の会
	椿　　しんいち	大田区議会公明党
	杉　山こういち	日本共産党大田区議団
	本　多たかまさ	日本維新の会大田区議団
	松　原　　元	つばさ大田区議団
	清　水　ち　こ	東京政策フォーラム（都民ファースト・国民民主・無所属の会）
	小　川　あずさ	立憲民主党大田区議団

４　視察報告

項目ごとに各会派の視察報告を記載

（１） 富山県富山市

◆視察項目
富山市立図書館本館について

（自由民主党大田区議団・無所属の会）

平成 27 年８月に開館。元々百貨店があったところに、駅前再開発の話が持ち上がり、開発準備組合が富山市ガラス美術館と富山第一銀行本店、富山市立図書館本館の入居を打診、数年に亘る協議の結果、複合施設「ＴＯＹＡＭＡキラリ」として開館した。設計は、国立競技場も設計した、隈研吾氏である。

建物は、ガラスと木材がふんだんに使われており、エントランスから大変開放感にあふれていた。全フロア６階建ての内、１、２階は図書コーナーがなく、同じフロアにガラス美術館が併設されているため、一見、図書館には見えない贅沢な造りになっている。書架や館内案内図、ピクトグラムも隈研吾氏のこだわりが随所に見られ、非常に洗練された印象を受けた。

図書館の数としては、本館の他に、富山駅前に１か所、地域館６館、分館を 16 館。移動図書館も行政サービスとして提供している。

蔵書数は、全体で 42 万冊を超える。大田区は 180 万冊あるため、蔵書数では人口比にすると多めではあるが、図書はその質も大切であるため、選書もポイントになると考える。

図書館本館内では様々な催事も行われている。こどもへの読み聞かせ会、おはなし会、音楽イベントは当然のことながら、市民病院との連携セミナーや起業創業セミナーも開催されている。場所貸し出しの観点などから、どのようにイベントを組み立てているのか伺ったところ、職員皆さんで知恵を出し合いながら、他部局にイベントの提案をしているとのこと。本館窓口業務は委託事業者が運営しているが、館の運営自体は正規職員 50 名程度でなされている。

図書館本館を視察後、本館で紹介のあった「駅前図書館」を訪ねた。ここは、こども施設と併設されており、駅前商業施設のワンフロアを富山市が所有しているとのこと。ここでも部局間連携がスムーズに行われており、今後の大田区図書館の再編に当たっては、他部局との連携が必要不可欠であると感じた。

（大田区議会公明党）

富山市立図書館本館は、地上６階建ての複合施設 「ＴＯＹＡＭＡキラリ」の中にあり、ガラス美術館と併設されています。施設は隈研吾氏の設計によるもので、斜めに大きな吹き抜けになっており、富山県産の杉の木を使用したルーバーが全体に配されて、森の中にいるような感覚になります。また、いたるところに椅子やテーブルがあり、静まり返った感じではなく、本を読むための環境は維持しつつも、まちなかの賑わいも感じられます。

富山市の図書館は、本館以外に地域館６館、分館 16 館、その他の館２館、自動車文庫２か所の計 25 館で構成され、本館の役割は、大田図書館と同様に、全館の配置資料の選定・収集、配架、除籍などを管理するとともに、それぞれの特性に応じた運営指導や各種事業の企画など、全館のサービス向上を担っています。また、コンサートやお話会、起業・創業セミナーや小説家を招いた講演会など、読書に興味を持たれない方への来館促進の取り組みも積極的に展開されているとのことです。年間の貸し出しは 168 万冊、予算は８億５千万円です。旧本館は昭和 45 年の開館から 40 年以上が経過し、老朽化してきたこと、市民のニーズの変化、中心市街地の活性化を図ることを目的に、平成 27 年に新築移転しましたが、検討から５年で本館開館となっています。

本区の中央図書館も同じく昭和 45 年の開館で、既に築 53 年経過し、更新の検討がされていますが、富山市立図書館本館に倣ってスピード感をもって進めていきたいと思います。

（日本共産党大田区議団）

大和百貨店の跡地に富山第一銀行が銀行ビルを建設する時期に、市として参入し複合施設として計画、富山第一銀行が１階の一部に店舗、７階から９階を執務室に、吹抜けをはさんで、１階の一部に図書館とガラス美術館の共通玄関と情報コーナー、図書館機能は北側の３階～６階に、ガラス美術館は南側の２階～６階のフロアとした複合施設となっています。３階の児童図書フロアには３万冊を配置し書架やベンチはこどもの身長や目線に合わせ、他のフロアより少し低めに設定していました。また、フロアの一画にこどもが素足でくつろげる「ふれあい交流ルーム」があり、視察時には幼児と母親が眼下に走る路面電車を眺め親子でくつろいでいました。

４階は一般図書フロアとして約８万冊、約160席の閲覧席が設けられ北側の窓際に端から端まで閲覧用のカウンター席となっています。５階は参考図書フロアとして約３万冊、閲覧席約100席が配置されています。また、雑誌約500誌のうちスポンサー200社が雑誌を提供しており、雑誌のカバーには提供しているスポンサーの社名が記されています。

静かに読書したい人や勉強したい人のためのガラスや壁で仕切られた静寂な部屋も配置しており、工夫がされています。富山市立図書館本館と６の地域館は市立直営、16の分館と富山駅南図書館、こども図書館は委託で運営されています。本館の役割は中央館として全館の配置資料を選定。収集し、配架、除籍等、蔵書約100万冊を管理すると共にそれぞれの館の特性に応じた運営指導や各種事業の企画に努め、全図書館のサービス向上を図っています。年間貸出し書籍は168万冊、人口は41万人で１人４冊以上借りていることになります。大田区の中央図書館にも活かせるところがあると感じました。

（日本維新の会大田区議団）

富山市立図書館本館は、「ＴＯＹＡＭＡキラリ」の愛称で、富山市ガラス美術館を併設し、平成 27 年(2015 年)に開館した。複合化に至った経緯は、図書館本館の老朽化に伴い、図書館本館とガラスの街、富山市としての、ガラス美術館を複合的に整備し、まちなかの賑わい創出や、文化や情報など豊かな知的資源を受容できる環境としての相乗効果を創出することを目的とし複合化に至る。建物は建築家、隈研吾氏によるデザインで設計され、外観は立山の雪と岩脈、ガラスなど硬さをイメージし、内観は、隈研吾氏の特徴でもある木材（県産材の杉材）がふんだんに使用され、柔らかいイメージを醸し出し、中でも中央部は、山を登るイメージで、開放的な斜めの吹抜けになっており、非常に前衛的な、より足を運びたくなるデザインとなっている。

特徴的だったのは、多くの図書館は、本を読むために静かな環境を保つが、この図書館は、街中の賑わいが感じられる図書館として、開放的なスペースに、たくさんの椅子やベンチを設けくつろげるスペースとなっている。加えて、本を持ったまま美術館や行くことや、２階のカフェでお茶を飲みながら、本を読むことができるなど、都市の中で、居心地の良いリビングのような空間を創り出している。また、閲覧室は、学生専用や社会人専用のスペースを設け、幅広い層が活用できるよう配慮がなされている。本区における図書館も老朽化が進んで、近い将来建て替えが必要となってくるものもあり、その際には、このような非常に良い取り組みを行っている図書館も参考にし、また運営面においても、すぐにでも取り組めるものは大いに活用し、より良い図書館運営に努めていくべきと考える。

（つばさ大田区議団）

８月 21 日（水）、富山市にある富山市立図書館本館の行政視察を行った。富山市は人口 40 万人余りに対して、同図書館の他に地域館（旧町村立図書館）６館、分館 16 館、その他２館、自動車文庫 2 台を擁し約 100 万冊の蔵書を誇る。これは大田区が 74 万の区民に対して、区立図書館 16 館、図書館同種施設１館、図書サービスコーナー１館、約 189 万冊の蔵書を考慮すると、区民１人あたりの蔵書数は比肩し、施設数では相対的に優位にあると考えられる。

今回視察を行った富山市立図書館本館は、2015 年にオープンした新鋭図書館であり、建物（ＴＯＹＡＭＡキラリ・隈研吾氏設計）内には美術館と銀行が併設されていた。同施設の外観は市内でも威容を誇りまるで銀座の一角にあるかのような佇まいであった。内部はなんとも来訪者を仰天させるつくりを有していた。２階から６階部分まで建物中

央部分が斜めに吹き抜けになっており、その６階ガラス窓から差し込む自然光は、樹木を強調した内装と調和していた。言葉で形容することは難しいが、読書を営む環境としては、あまりにも贅沢な空間であるとの感想も持った次第である。この環境を好んでか、大変若者が多く出入りしているように感じた。また同図書館は、優れた読書環境を有するだけでなく、街の賑わいに貢献する取り組み（大学と連携したセミナー、コンサート、ワークショップ等）を多数実施していることも注目に値する。こどもから大人、老人までこの施設に足を運びたいと思わせる行事を毎月計画的に実施している。

本視察を終えた所感としては、大田区の図書館が富山市立図書館本館ほどのインフラを持ち得ることは現実的ではないかもしれないが、街の賑わい交流を行うランドマークになるべく運営方法を考えていけば、大田区の目指す地域力の維持・発展に資すると考えた次第である。

（東京政策フォーラム（都民ファースト・国民民主・無所属の会））

図書館の老朽化や市民のニーズの変化があり、コンパクトシティの実現などにより、人が集い、学び、憩えるまちなか情報拠点をめざして、複合施設「ＴＯＹＡＭＡキラリ」が2015 年に建てられた。建物は隈研吾が手掛け、“まちのなかのリビング”の名にふさわしく、開放感があり、心地よい空間が広がっていた。

様々な施設が入っている複合施設だが、内装に統一感があるため違和感は全くなく、館内を斜めに貫く吹き抜けがあり、県産の木材がふんだんに使われ、明るくて温かみのある建物である。

・持ち込み学習が可能な席と禁止している席とに分け、閲覧者向け席を確保する工夫がされている。
・レファレンスサービスが充実しており、２ヶ所で読書相談が可能。
・予約図書受取室や自動図書貸出機を設置。
・雑誌約500 種の内、約200 種類にスポンサーが購読料を支払っており、雑誌表紙と裏面に企業名が貼られている。
・おすすめ図書と共に、ポップが飾られており、大変好評で、県内の24 館巡回して一定期間ずつ飾られている。
・交流行事に力を入れており、セミナー、講演会、コンサートなど、多数実施している。
・ＳＮＳサイトを作り、情報発信を毎日行なっている。

富山の新たな街づくりを象徴するシンボル的な建築となっており、「まちなかの賑わい創出」及び「知的創造・芸術文化の発信の場として相乗効果を期待」を果たしていた。建物の基本理念が明確でわかりやすく、地域の伝統産業を取り入れていることで、観光としても利用できていることは、とても貴重な学びとなった。来場者は平日約１千２百人、週末約４千人と、旧館の約３倍以上あり、本区においても図書館を建て直す際には参考にしたい。

（立憲民主党大田区議団）

児童生徒の学力向上には、様々な要因が関係しますが、私は自身の子育てや教育現場

での経験から、読書は学力や学習意欲につながる重要な要素であると考えており、読書教育をこれからも重視すべきだと思っています。その読書教育にあたり、図書館は重要な役割を果たしており、区の教育行政にも、図書館は深く関わってくると思います。

今回訪ねた富山県は、全国学力テストで常にトップクラスにはいる成績を収め続けている県で、その教育行政には、非常に興味があるところですが、そこにある図書館を見させていただいたのは、大変勉強になりました。この図書館、通称ＴＯＹＡＭＡキラリは、富山市立図書館本館と富山市ガラス美術館のある施設で、2015 年にオープンしたそうです。びっくりするほど豪華な造りで、たくさんの椅子やベンチも備えて、本を持ったまま自由に館内を回遊でき、居心地の良いリビングのようになっています。蔵書も充実しており、本来の図書館という役割はもちろんのこと、自由に時間を過ごせる居場所としても機能しており、市民のまさにリビングとなっているようです。５階には静かに読書や勉強をしたい人のための自習室である閲覧室があり、広い部屋ですがほぼ満席で、夏休みのためか中高生たちも多く、脇目もふらず勉強しており、このような生徒がたくさんいて、富山の学力レベルの高さにも納得するものでした。改めて、わが区でも、このような皆が集まれて、読書や勉学に勤しめるそして居場所としても重要な役割を果たす、図書館について、区で考えていかなければいけないと感じました。

（２） 大阪府寝屋川市

◆視察項目

寝屋川市立望が丘小学校・中学校について

（自由民主党大田区議団・無所属の会）

元々の明和小学校、梅が丘小学校、第四中学校の３校を統合し、明和小学校の校庭敷地を利用する形で、本年４月に開校したが、現在も明和小学校の解体工事中で、この先グラウンド整備を行っていくとのことである。

望が丘小・中学校ができた経緯は、児童・生徒数の減少をたどってきた中で、子育て世帯に選ばれる自治体・地域をめざし、『まちづくりの「メインアイコン」となるデザイン性のある学校』、『新住民を呼び込む訴求効果のある学校』をコンセプトとし、平成 29 年４月から計画された。設計は著名な建築家であり、大田区とも縁の深い隈研吾氏が設計監修され、『木をふんだんに使い、木の香りがする柔らかい空間』、『こだわりのある、家の家具のように曲線を多く使った家具のデザイン、場所を示すサインやトイレのデザイン』など大変特徴のある学校に仕上がっているだけでなく、オープン教室、廊下の学習スペース、広い職員室、ウォシュレット全数完

備など未来を見据えた学校設備が施されていた。かなり立派な学校ではあるが、延床面積は約２万㎡で総建築費は100億円余であり、大田区で作る学校や施設と工事費の㎡単価は同じ位であることがわかった。

子育て世帯に選ばれる大田区をうたい当選した鈴木晶雅区長が昨年から新区長に就任し、老朽化し改築を待つ学校が多数ある大田区としても、改築などの投資的経費の増は、持続可能な自治体を目指す上で厳しいが、望が丘小・中学校のように、コストも大田区と変わらずにこのような素晴らしい学校ができるのであれば、先進自治体の好事例として学び、私たち議会としても、子育て世帯に選ばれる大田区をめざしていく上で重要な視察となった。

（大田区議会公明党）

寝屋川市立望み丘小学校・中学校は、「明和小学校」「梅が丘小学校」「第四中学校」の３校を統合する形で「明和小学校」の跡地に小・中一貫校として令和３年に開校しました。設計監修は建築家の隈研吾氏で、「こども達が通いたい、こども達を通わせたい」と思わせるデザインで開発されたそうです。校舎のレイアウトは逆コの字型で、外観から木材がいたるところに使われ、１階に職員室や体育室、多目的室や校長室があり、職員室は小・中同じエリアで、入口以外の３面はすべてガラス張りで、運動場からも先生が見え、先生からも外のこどもたちがよく見えるよう工夫されていました。２階から上が児童・生徒の教室となっており、中央部分が共有教室でそこを境に小学生（１年～６年生)・中学生（７年～９年生）と別れています。中に入ると１階から４階までの大きな吹き抜けに驚かされます。廊下も広く、いたるところにテーブルや椅子が設置され、クラスを超えた交流などコミュニケーションを取りやすい造りで、まるでショッピングモールにいるようなわくわく感を感じました。また、図書室がなく、ひな壇式のホールがメインの図書コーナーでしたが、廊下のいたるところに図書が飾られ、身近に本を感じられるよう学校全体が図書館という工夫がされていました。１階の１室は地元に開放され、外からのみ出入りが可能で、学校側からはスケルトン。地域住民への配慮も感じました。ただし、電気代は以前の３校合わせた額と変わらないという事で、今後の課題と伺いました。本区の建て替えに活かしていきたいと思います。

（日本共産党大田区議団）

隈研吾・梓設計・オオバ共同企業体が基本設計・実施計画を担当していることは、大田区にゆかりのある方々で驚きました。校舎には木をふんだんに使い、木の香りがする柔らかい空間を醸し出しています。2024年４月に創立、２小学校と１中学校を統合した小中一貫学校となっています。コの字型の校舎で１階に職員室、屋内運動場、音楽室、特別支援、多目的スペース、地域交流スペースなどが配置され、２階～４階が教室、５階に室内プールが設置されています。廊下の幅が広く全体的にゆったりとした空間を作っています。廊下には書棚が張り巡らされて、学年に合わせた書籍が揃えられています。

３階のメディアセンターが図書室的な部分を担っており開放された空間となっています。大田区で見てみると、志茂田小学校・中学校は小中一貫校ではないが校舎は一体型で翼のかたちなっており、志茂田福祉センターとの複合施設が似ていると感じました。寝屋川市では望が丘小・中一貫校をモデルケースにしてさらに小中一貫教育を進めていくようですが、一貫教育の弊害もしっかりと把握して行くことも必要ではないかと思います。

（日本維新の会大田区議団）

本校は、平成 29 年４月に策定された小中一貫校設置実施計画により、小学校２校、中学校１校を統合する形で開校された。

設計にあたっては、著名建築家の、隈研吾氏が起用されているため、経緯を尋ねたところ、公募型プロポーザル方式による募集であるとのことであった。設計にあたって下記３点をコンセプトにしている。

１、まちづくりのメインアイコンとなるデザイン性のある学校
２、新住民を呼び込む訴求効果のある学校
３、寝屋川方式の学習法の確立(考える力、学力、体力をつける学校)

校舎は、隈研吾氏のデザインらしく、ふんだんに木材が使われ、柔らかい、温かみのある学校空間となっており、中庭を囲む形で、小学校と中学校が向かい合わせにU字型の構造で校舎が作られており、小学生、中学生が同じ空間を共有し、一体感が生まれるような作りとなっている。また、５階に屋内プールが設置されており、メリットとして、天候に左右されず、予定通りのプール授業ができること、屋外プールと違い、外部から生徒の姿を見られることがないなど、プライバシーが保護されていること、また、葉っぱや虫などによるプールへの汚れが生じない等々、屋内プールには様々な利点があり、一方で、デメリットとしては、気温が低い日は水温が上がりにくいことが挙げられるとの説明を受けた。各教室、廊下等は、木材の温かみと共に、広々とした空間で作られており、また廊下には教室との間にたくさんの本が置かれていたりと、読書気運も駆り立てられる素晴らしいデザインとなっている。

本区における学校設計にも取り入れるべきことも多く、出来ることはすぐにでも実践していきたい。

（つばさ大田区議団）

８月 22 日（木)、行政視察２日目、酷暑の中、寝屋川市立望が丘小学校・中学校の行

政視察を行った。照りつける日光の中、遠方から建築されて間もない同校を望んだ際には、灰色の屋根と白い建物からか、さながら兵庫県の姫路城を連想したところである。同校は、令和６年４月から２つの小学校と１つの中学校が施設合一し、１年生から９年生までを抱える一貫校である。一学年につき４～５クラスを擁し、実に約 1,000 名の児童生徒が在籍する。視察時は、夏季休暇中ということもあり、あまり校舎内に児童生徒はいなかったものの、外観がコの字に形成された新校舎は、その内部も大変独創的な設計であり、こどもらは伸び伸びと学び、成長するために、十分な空間的な余裕を有しているように思えた。設計は、梓・隈研吾・オオバ共同企業体（公募型プロポーザル）が行なったとのことである。奇しくも、前日の富山市立図書館本館の設計者と接点がある。内部構造の其処彼処に類似性を感じたわけである。委託契約後１年間で設計し、工事開始から２年間での完了は率直に羨ましく思う。

木材をふんだんに利用した内装、さらに吹き抜けを多用して一体感を演出する校舎で学ぶことができることは、児童・生徒の発達に良い意味で大きな影響を与えることになると考える。私は、幼少の折、当時は新鋭の校舎であった大田区立小池小学校から、大田区立貝塚中学校に進学した経験を持っているが、中学校に進学時、学びの環境に大きな落差があり大変残念に思った記憶がある。その点、本校は小中一貫校であり、その様な葛藤を覚える心配はないものと考える。大田区にも、これだけの設備を有する小中学校が、今後整備されていくことを心から祈念する行政視察となった。

（東京政策フォーラム（都民ファースト・国民民主・無所属の会））

◎隈研吾氏が設計監修を手掛け、３校（小学校２ 校と中学校１校）を統合し、１～９年生が同じ校舎で学ぶ施設一体型の小中一貫校は、校舎が広い中庭にU 字型に建てられ、１階から４階まで吹き抜けとなっており、木材がふんだんに使われ、開放的かつ木の温もりが感じられる空間が印象的であった。

◎オープンドア型の教室、天井の高い体育館、全天候型の屋内プールなどがあり、壁一面を覆う巨大本棚は、気軽に本を手に取って自然に読書や語らいが生まれるように作られている。

◎廃木を使った室名プレートや、ピクトグラム表示など、様々な新しい特長を持つ。

◎小・中学生の下駄箱は階を分け、混雑緩和のために登校時間をずらす等の工夫をするなど、クラスや学年を超えた学習・活動・交流を誘発する空間で、学習意欲や情報収集力、自ら考える力を引き出す場となっていた。

◎「寝屋川教育」の旗艦校として、そして街づくりのメインアイコン（象徴）としての役割を担い、地域の学びの核となるよう建設された学校は圧巻であった。教員室も小・中学校の教員が共に同スペースにおり、先生同士が話しやすい環境で、児童・生徒の成長が実感を持って見守れる体制がとられているなど、教育内容の量的・質的充実への対応にもつながっているように感じた。また、小中学校がお互いに協力し、９年間の連続性に配慮した教育に取り組むきっかけとなっている印象を受けた。壮大でありながらも、まちと自然が調和した学校であり「この街に住みたい」と思える場づくりは、本区においても大変参考になる場であった。

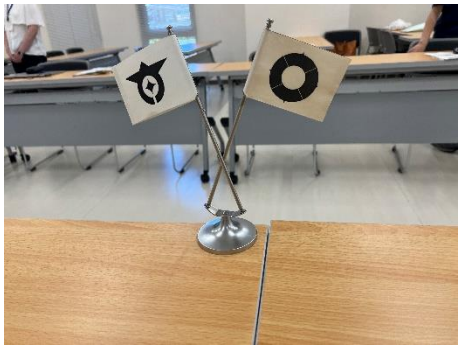
（立憲民主党大田区議団）

昨日の豪華な図書館に続き、この寝屋川市立望が丘小中学校も施設の豪華さや美しさに驚かされました。木をふんだんに使った柔らかい空間の中で、のびのびと児童生徒が学べるようになっていて、教室だけでなく理科室や工作室、家庭科室などの特別活動室も、各部屋広々と活動できるようになっていて、入り口のプレートも木というこだわり。

なかでも音楽室にはたくさんの楽器が備えられていて、小中一貫のため、小学生では普通知らないような楽器を早い時期から見たり触れたりできたりするようです。最上階の５階にあるプールは室内にあり、スイミングクラブのようなきれいなプールでしたが、天候に左右されず授業ができるし、外部から児童生徒の授業の姿が見られないなどの利点があるようです。あれっと思ったのは、設計図に図書館がなかったことですが、各廊下にふんだんに本棚が置かれ、その学年にあった必要な読み物などが並べられており、また、３階の階段状のスペースに大きな本棚があり、そこでは自由に本を読んだり、座ったりできるようになっているようです。

これだけ施設が大きくなると、図書館を１つの所にしたとしても、そこに行くのに億劫になって行かなくなる可能性もあるし、小学校１年生と中学校３年生は全く読む本が違うと思うので、このようにちりばめて目的にあった本をおくことで、逆に手軽に本に触れることができるし、良いのかもしれないと思いました。小中一貫には、小学校卒業の区切りがなく、こどもたちの気持ちがリセットできにくいとの課題もあると思いますが、先生方の学習への連携なども意見交換しやすいし、今後増えていくものと思われます。参考になりました。

（３） 大阪府豊中市



◆視察項目

子どもの居場所ネットワーク事業について

（自由民主党大田区議団・無所属の会）

昨年度に開設したばかりの豊中市庄内コラボセンター「ショコラ」内に設置された「はぐくみセンター」を視察した。「ショコラ」は４階建てで、１階が「子育て支援センター分室」「市民公益活動支援センター」「保健センター」、２階が「図書館」「こども・教育総合相談窓口」、３階は「出張所」「しごと・くらしセンター」「介護予防センター」、４階に公民館貸室と、いわゆる複合施設である。この敷地は、統廃合する学校の跡地活用施設である。この施設内にある「子供・教育総合相談窓口」を運営している「はぐくみセンター」は、大田区でいう「こども家庭支援センター」の機能が近い。様々な相談機能を持ち、児童相談所と連携をする。豊中市の特色としては、このセンターとは別に「こどもの居場所」「豊中型認定居場所」「児童育成支援拠点」など、アプローチ方法を様々持たせている点である。

主に４種類の居場所「子ども食堂」「学習支援」「すごし場」「体験活動」を設けており、これらの事業を行っている地域活動グループをネットワーク化している。このポイントが「居場所コーディネーター」の設置であり、「市域コーディネーター（３名）」と「圏域コーディネーター（11 名）」が活躍。この方々は、居場所の立ち上げや運営を支援するほか、ポータルサイトの運営やネットワーク会議の開催、ボランティア講座やセミナー開催を行っている。市内に様々なスキルを持つ方を「サポーター」として登録させ、居場所の事業に合わせて派遣する事も行っている。

大田区でも社会福祉協議会や区民協働コーディネーターが同様の役割を担っていると思うが、豊中市は、子どもの居場所づくりにフォーカスを当てている。大田区のこども食堂においても、食材調達や、運営を軌道に乗せるまでの伴走支援など、既に課題は表面化している。他自治体の取組で良い事例は積極的に取り入れ、大田区にフィットする施策として創出していきたい。

（大田区議会公明党）

豊中市のこどもに関する調査で、①学校教育活動以外での体験・交流機会の減少、②困窮家庭のこどもほど大人と過ごす割合が低い、③居場所がないこどもは相談相手が少ない、といった結果を重く受け止め、実態が見えにくく、捉えづらいグレーゾーンといわれている貧困層を発見し、必要な支援に繋げていく事を目的に、こどもの居場所づくりを推進してきました。こどもの居場所を、①こども食堂、②学習支援、③すごし場、④体験活動、の４つに分類し、令和６年８月 23 日現在で、62 ヶ所の居場所が登録されているとの事です。その各居場所を支援しているのが居場所コーディネーターといわれる方々で、市民からボランティアをやりたい相談があれば居場所コーディネーターが居場所の立ち上げから運営までアドバイスしてくれ、市域コーディネーター３名と圏域コーディネーター11 名で構成されています。本区は大田区社会福祉協議会がその役割を担っておりますが、市が管理することで現場の声がダイレクトに伝わるメリットを感じました。学校との繋がりについて質問したら、ＳＣやＳＳＷとも連携が取れていると伺い、教育委員会と子ども支援課が一体となって情報を共有されていることも参考になりました。また、４種の居場所の方々のスキルアップとして、「いこっとセミナー」を開催し、子ども達の変化など、気にかかった子どもに関しては、市独自で作成中の個人情報を厳守したチェックシートを活用する点など参考

になりました。

本区においても４種の支援団体は多くありますが、そこでグレーゾーンといわれている気になったこども情報の吸い上げとその後の適切な支援が大きな課題と感じていました。特にチェックシートは作成中との事でしたので、ぜひ完成した時は今後の区政に参考にしたいと感じました。

（日本共産党大田区議団）

豊中市が取り組んでいる「子どもの居場所ネットワーク事業」は 2018 年度から地域資源調査・研究を開始し、2019 年度に子どもの居場所ネットワーク事業を試行、ロードマップ策定、５ヵ年計画で行う重点施策に位置付け進められ取り組まれて来ました。2020 年度に子どもの居場所ネットワーク事業を本格的に稼働させ、ポータルサイトを開設し、子ども食堂フードデリバリー事業補助金を開始しています。さらに 2021 年度からは子どもの居場所づくり推進事業補助金が開始されました。2022 年度には市委託による週５日開設の居場所や子どもの居場所・相談支援拠点のモデル事業を実施しています。2023 年度では子どもの居場所・相談支援拠点事業（児童育成支援拠点事業）を本格実施しています。

子どもの居場所には①子ども食堂②学習支援③すごし場④体験活動の４種類あり、地域の子ども（主に学童期から高校生世代）を対象に、地域ボランティアが無料または低額で居場所を提供して見守りや支援で関わり、必要に応じて食事の提供や支援機関につなげる取り組みを実施しています。年に数回以上、定期的に実施する居場所（いこっと）は 2024 年８月 23 日現在、市内 62 ヶ所が登録されており、多様な居場所づくりを公民協働で推進しています。居場所コーディネーターを設置し学童期の子どもの支援や困っている情報を吸い上げ市につなげるなどの体制を整えています。しかし、豊中市の子どもの居場所づくり推進事業補助金の 2024 年度予算額は 900 万円であり、居場所を応援したい方からの食料品の寄附や寄付金を募っていますが、事業の推進拡大を進めるためには予算の増額が必要ではないかと感じました。大田区でもこども食堂などの運営は居場所となっています。そこへの支援の強化が必要と感じました。

（日本維新の会大田区議団）

豊中市において、こどもの生活に関する実態調査を行ったところ、こどもの学校教育活動以外での体験、交流機会の減少や、困窮家庭のこどもほど大人と過ごす割合は低く、居場所がないこどもは相談相手が少ないと言う結果であった。この結果からこどもたちの育ちを支え、すべてのこどもを支援する仕組みづくり、グレーゾーンに隠れている実態が見えにくく、捉えづらい貧困層を発見し、必要な支援につなぐことが重要であると、こどもの居場所ネットワーク事業をスタートさせる。子供の居場所には、「すごし場、ささえる場」があり、豊中市には、主に次の４種類の居場所がある。①子ども食堂、②ボランティアによる学習サポートを受けられる学習支援、③そして遊んだり話したり、自由に時間を過ごすことができる、すごし場、④そして体験イベント等のプログラムを開催する、体験活動。そして、主な事業内容としては、①居場所コーディネーターの設置

（事業全体、及び市域の業務を担当する市域コーディネーター、また、各居場所を巡回、状況把握、支援を担当する、圏域コーディネーターなど、現在 14 名が登録）
②居場所の立ち上げ、運営支援（前述のような４種の居場所の支援を行い、現在 62 箇所が登録）、③ポータルサイトの運営（居場所登録やボランティア登録、寄付の窓口等々）、④ネットワーク会議の開催（地域全域、または地域別の交流会など）、またボランティア、運営者向けの講座や、加盟団体への補助金の交付等々の事業を進め、「こどもまんなか」をキーワードに、多様なこどもの居場所づくりを公民協働で推進していく事業である。
　本区としても、今後子ども家庭総合支援センターなどの開設を予定しており、このこどもの居場所ネットワーク事業も大いに参考にすべき取り組みであると考える。

（つばさ大田区議団）
　行政視察３日目、昨日と同様の酷暑の中、庄内コラボセンターショコラにて、豊中市の「子どもの居場所ネットワーク事業」の説明を受けた。なお、会場となった庄内コラボセンターは、豊中市南部地域の公共施設を統合した施設で、子育てから就労支援まで様々な相談をすることができる複数の施設が収容されている。詳細は以下の通りである。子育て支援センターほっぺ南部分室、市民公益活動支援センター、保健センター、図書館、こども・教育総合相談窓口、豊中市役所庄内出張所、しごと・くらしセンター、介護予防センター、である。おおよそ大田区の地域庁舎と特別出張所、図書館が統合された施設に相応すると考える。なお、事業の説明を受ける前に、豊中市の PR 動画を視聴した。５分間の動画からは、豊中市が、大阪府の北摂エリアに存立し公営住宅地として発展してきたこと、高校スポーツの発祥の地であるという歴史や文化的には音楽面で優れた人材を輩出していること、また阪急電鉄と伊丹空港と面し極めて交通の便に優れることなど、豊中市が如何に優れているかを窺い知る事ができた。
　本題の、「子どもの居場所ネットワーク事業」であるが、大田区の「長期休暇中のこどもの居場所づくり補助事業」に類する事業であるが、大田区よりもより体系的に事業が構築されていると感じられた。ポータルサイトの運営、居場所の立ち上げ・運営支援サポーターの派遣、市域会議・圏域交流会の開催、居場所ボランティア講座の開催、物資・資金の寄付の調整等、これらを羅列するだけでも、なんとしても市内に子どもの居場所を増やしていこうとする豊中市の熱量を感じる。学ぶべきことは多くあると考えるが、まず大田区は、地域団体の補助金申請をより簡素化する必要を感じた次第である。

（東京政策フォーラム（都民ファースト・国民民主・無所属の会））
　2023 年に開設された４階建ての「豊中市庄内コラボセンターショコラ」の見学及び「子どもの居場所ネットワーク事業」について伺った。館内には、９つもの施設が入居し、子育てから就労支援まで様々な相談をすること可能で、こどもから大人まで

誰もが気軽に立ち寄れる場であった。ガラス張りの図書館では、飲食・会話可能であり、リラックスした雰囲気で本に触れる空間となっている。子育て支援センターでは、プレイルームにスタッフが常駐し、多くの親子で賑わっていた。

主な事業として「居場所の立ち上げ・運営支援」「ポータルサイトの運営」「ネットワーク会議の開催」「ボランティア講座・セミナーの実施」「ボランティア募集」等を行う。豊中市委託事業「いこっと」は、豊中全体で子どもを育てることをビジョンに、居場所運営者の声や、サポートしたい人の情報を掲載しており、子どもの居場所ポータルサイトを運営している。「子ども居場所づくり推進事業」令和６年度は9,000千円補助金を得て実施。いつでも誰でも参加でき、時間的な制限がない「すごし場」と、放課後の子どもの居場所や、学習支援・子ども食堂など、子ども自身の困難に寄り添う「ささえる場」を展開している。”（ほぼ）なんでも公民館”と呼ばれ、市民に親しまれている場であり、相談者のニーズに合わせて、その他の施設や団体と連携を行うことが可能であり「生活上の困りごとがあれば、まずはショコラに行けばいい」と言われている事が納得できる施設であった。

「豊中のまち全体が子どもの居場所になる」と掲げ、まちづくりを推進し、“子どもまんなか”をキーワードに、子どもの育ちを支えることを目的として、全力で取り組まれていることがわかり、子育て世帯に選ばれる街を目指す本区においても、更に踏み込んだ多様な子どもの居場所づくりを公民協働で推進していく必要性を強く感じた。

（立憲民主党大田区議団）

こどもの育ちを支える居場所づくりは、行政の政策において、最も重要なもののうちの１つです。かつてより大阪のベッドタウンであった豊中市は、多くの子育て世帯が現在も居住しており、子育て世帯への支援である子どもの居場所ネットワーク事業に力を入れているとのことで、参考にさせてもらうために、豊中市庄内コラボセンターショコラを訪ねました。まずいいなと思ったのは、市の職員の方の名刺が柔らかい印象のある字で可愛いイラストが付いており、近づきやすさを感じさせるもので、工夫していると思いました。身近に相談に行きたい時に、職員の方と距離がある感じは決して望ましいものでなく、このような工夫にも子育て世代を大切にする気持ちが伝わってきました。

重視しているのは、見えにくい支援の必要な家庭にアプローチすることのようで、そのため居場所コーディネーターを設置して、各居場所を巡回したり、コミュニケーションを取り合ったりする体制ができています。若い人たち中心に利用の多いインスタグラムでも発信を積極的にしているそうで、コーディネーターのおかげで、支援の必要な家庭のキャッチ力も上がっているとのことです。ショコラは、保健センター、公民館、図書館、出張所、仕事センター、会議室など複合施設で、１カ所で用事が済ませられる便利さがあります。見に行った日には、１階で赤ちゃん交流会をやっていて、微笑ましい赤ちゃんとお母さんのみんなで一緒に遊ぶ姿が見られて、こちらまで幸せな気持ちになりました。合わせて、食器や衣服のリサイクル利用などもここでできるようになっていて、子育て世代は特にあちこちにすぐに移動できないため、１つのところでたくさんの用事が済ませられるのは、大事だと思いました。

このような取り組みを参考に、大田区にもできる事はまだまだあると感じました。